

表層の下に闇がにじんでくる 「人形劇」を遥かに超えたジゼル・ヴィエンヌの世界

石井達朗

ジゼル・ヴィエンヌの作品を初めて見たのは、2010年のフェスティバルトークョー (F/T) で招聘された国際共同作品『こうしておまえは消え去る』だった。

舞台一面が、演技する場所もないほど「林」になっているのには驚いたが、それ以上にその作風に心奪われた。演劇でもなくダンスでもない。登場する人物たちの佇まいに漂う異様なまでの緊張感。時間の流れは何かが起こりそうな予兆を孕む。そして何かが起こる。血を見たかもしれない。あとあとまでも尾を引く戦慄……。

ロマンティック・バレエの代表作のタイトルロール、ジゼルは美しく純粹、けなげで儂いけれど、同じ名をもつジゼル・ヴィエンヌがつくる世界は、あまりにその対極にある。作品から判断すると、インスタレーションを主に展開するアーティストかと想像したが、人形作家としての背景があることは意外だった。そういえば舞台に人形もあった、というぐらいの印象しかないのだ。「人形劇」などというものを遥かに超えている。パフォーマンスアートというのでもない。とてもひとつのジャンルに収まりきれない。

過剰にはならず、説得力のあるインスタレーションがある。そこに人形がいて、人物が行動し、照明がゆっくりと変容し、言葉や声が飛び、サウンドがかぶさる……。それらがトータルに働きかける。ジゼル・ヴィエンヌの舞台では、どんな人形であっても、そのリアルな存在感は不気味なほどだ。しかし、不思議なことに人形そのもののイメージは次第に後退してゆく。形容しがたい暗雲のようなものが舞台に充満してきて、観客席にまで漂い始める。そんな異物感が人形も人間も包み込んでゆく。

2014年にSPAC-静岡県舞台芸術センターが招聘した二作品『Jerk』と『マネキンに恋して』は、一筋縄では捉えられない特異なアーティスト、ジゼルを再確認するのに充分だった。前者は27人の青年を強姦殺人したという実際に起きた事件を下敷きにした人形劇。ひとりのパフォーマーがグローブ（手袋）人形を使い分けながら演じてゆく。子供に腹話術を見せるような偽りのエンターテインメントを装いつつ語られる残酷と暴力。このおぞましさはどうだろう。後

者はマネキンたちとダンサーたちが同じ舞台に共存し、ジェンダーイメージを攪乱する。スペクタクル性のなかに官能と戦慄を漂わせる傑作だった。

『腹話術師たち、口角泡を飛ばす』は、『Jerk』の原作者でもあるデニス・クーパーが出演者との共同脚本で参加し、9名の腹話術師たちが一年に一度集まる会議というのが背景である。これは空想の物語ではなく、アメリカのケンタッキー州で毎年開催される国際的な腹話術師たちの会議から発想を得たという。かなり濃いキャラの腹話術師たちと、さらに輪をかけて強い個性を見せる人形たちがいる。

「腹話術」と言えば身近なところでは、いっこく堂の唇を動かさずに何体もの人形を使い分ける素晴らしいテクニックに親しんでいるし、アメリカには歴史に残る腹話術師エドガー・バーゲンがいる。バーゲンの魅力的な腹話術は、幸いにも銀幕のなかに残っている（とくに当時の有名なコメディアン、W・C・フィールドズと共演した『あきれたサーカス』（1939年）がいい）。いっこく堂でもバーゲンでも例にもれないが、腹話術というのはひとりの腹話術師が一体か複数の人形を扱うというのがふつうである。

そう考えると9名もの腹話術師たちが、それぞれの人形たちと一緒に同じ舞台にいるという設定自体が尋常ではない。複雑なのだ。舞台の上には腹話術師と人形の数だけの人格が存在するのだろうか。いや、事態はそれ以上に入り組んでいる。「腹話術師」という職業をもつ、生の人間たちもいるのだ。さらには誰のものともわからない第三の言葉がどこからともなく聞こえてくる。この異様な状況が生まれるテキストをつくったデニス・クーパーの仕事は、見事というしかない。

腹話術の楽しみ方というのは、一般的に腹話術師と人形とのあいだの、噛みあたり噛みあわなかつたりの受け答えである。人形があたかも独立したキャラクターであるかのように滑稽と皮肉があればあるほど、観客は満足する。個性的な人形たちは、彼ら自身では存在しえず、絶えず腹話術師たちにより息を吹きこまれる存在である。人形は、もうひとりの分裂した腹話術師でもあるのだ。

ある種の儀礼的な社交性をもって会議は始まる。人形は次第にヒトガタとなり、ありがちな表層の下に闇の領域をおびき寄せる。そして闇がにじむ。頭をもたげようと何やら蠢いているものがある。その不吉なものは何なのだろう。

石井達朗（いしい・たつろう） ISHII Tatsuro

舞踊評論家。ニューヨーク大学（NYU）演劇科・パフォーマンス研究科研究員、慶大教授を経て愛知県立芸大客員教授。関心領域として、サーカス、呪術文化、パフォーマンスアート。著書に『異装のセクシュアリティ』『身体の臨界点』『男装論』『サーカスのフィルモロジー』ほか